

動物に音楽がわかるのか？

最近、乳牛にモーツァルトを聞かせるというとか、猫がまどろむ音楽は何かという研究が行われつつあるようだが、実験による検証がなされる現在でさえ、まだまだ不明な点が多いらしい。それでもハトがバツハとストラビンスキーを聞き分けるとか、ヒトとは違うやり方で動物も旋律を認識するという、泉明宏氏の「動物の“音楽”認知」(『言語』大修館書店、2004年6月号)を読むと、やはり事実と考えていいのかなど、動物好きの筆者などは嬉しく思う。

動物は音楽に感応するのか。古代中国においては、このことをどう考えていたのだろうか。まず挙げられるのは、伝説上の皇帝である黄帝の時代に、楽人の夔が石を打ち鳴らすと、百獣がそれにつれて踊ったという次の記事であろう。

楽器がすべて調和し、秩序を失うことがなければ、神と人はみななごやかになる。夔は「わたくしが石を打ち鳴らすと、動物たちがみなそれにつれて踊ります」と述べた。

(八音克諧、無相奪倫、神人以和。夔曰於予擊石拊石、百獸率舞。)

『尚書』舜典

これは、調えられた音楽の力は異類をも感応させるという例として、後世繰り返し引用される「百獣率舞」である。『尚書』にはほかにも霊鳥と音楽の話がみえる。

簫という楽器で舜の音楽である「韶」を九度演奏すると、鳳凰がやってきて、礼義にかなった姿をみせる。

(簫韶九成、鳳皇來儀。)

『尚書』益稷

伝説の霊鳥である鳳凰は、雄と雌の声がそれぞれ6種類の音となり、それが十二律のものになったとも言われている。また、その羽を模した形の楽器を「鳳笙」と名付け、中国音楽との関わりが深い。霊鳥だからこそ音楽を理解する能力を持つ、とされたのかもしれないが、鳳凰を異類と見なすことは許されよう。

素晴らしい音楽が異類をも感動させるというこうした考え方は、中国古代では一般的であったのだろうか。そんなことはない、という懐疑的な考え方ももちろんあった。『莊子』に見える次の話は論理的ともいえそうである。それは鳥には鳥の楽しみ方があり、人間の楽しみを押し付けるのはかえって鳥には迷惑だという文脈のなかで記されている。

こんな話を聞いたことがあるかね。昔、一羽の海鳥が魯の郊外に舞い降りた。魯侯はめでたいしるしとして喜び、その海鳥を祖先の廟に迎えて饗宴を催し、「九韶」(舜の音楽)を演奏して歓待した。牛・豚・羊の肉をそろえて御馳走した。海鳥は目をばちくりさせて悲しむばかりで、一切れの肉も一杯の酒も口にせず、三日で死んでしまった。(中略)「咸池」(黄帝の音楽)や「九韶」を、洞庭の広野で演奏すると、鳥はそれを聞いて飛び立ってしまい、獣はそれを聞いて逃げてしまい、魚はそれを聞いて水中にもぐってしまう。人だけがそれを聞いて、みんなでまわりを囲んで観覧するのだ。魚は水に棲んで生きるが、人は水に溺れて死んでしまう。魚と人は好み異なるので、こうした違いがあるのだ。(且女独不聞邪。昔者海鳥止於魯郊。魯侯御而觴之於廟、奏九韶以為樂。具太牢以為膳。鳥乃眩視憂悲、不敢食一臠、不敢飲一杯、三日而死。(中略)咸池九韶之樂、張之洞庭

之野、鳥聞之而飛、獸聞之而走、魚聞之而下入。人卒聞之、相与還而觀之。魚処水而生、人処水而死。彼必相与異其好惡、故異也。)

『莊子』至樂篇

ここで注目したいのは、百獣がうちつれて踊るはずの、黄帝の「咸池」や舜の「九韶」という音楽を聞かせても、鳥・獣・魚は逃げてしまうとして、その好むところが全く違うとはっきりと言っているところである。人間の音楽のなかでも、調和して神と人がなごむとされる素晴らしいものを聞かせても、異類には理解されないと冷静に観察している。古代人はみな異類の感応を信じていたというわけではないらしい。そこには冷めた現実的な考え方がすでにあつたようだ。そういえば「馬の耳に念仏」と同義の「牛に対して琴を弾く」という故事成語もある。

魯の賢士の公明儀は、牛に向かって「清角」という琴の名曲を奏でたが、牛は相変わらず草を食べていた。牛が聞いていなかったのではなく、牛の耳にはそれが合わなかっただけである。(公明儀為牛彈清角之操、伏食如故。非牛不聞、不合其耳矣。)

『廣博物志』に引く『酉陽雜俎』

だとすれば、乳牛にモーツァルトを聞かせても無駄なのだろうか。人間と動物では、惹かれる音が違うのであろうか。とにかく、人間の愛する音楽は動物には理解できないと、古代の人がはっきりと認識していたことはわかる。百獣が素晴らしい音楽につれて踊るというのは、徳のある帝王によって治められた理想的世界である。しかしそれは実現が難しいこと、『尚書』のなかのこと、と考えられていたのであろう。

すぐれた帝王の音楽に動物が感応することを、治世の象徴と捉える儒教的な観点がある一方で、『莊子』にみえるような、動物には人間の音楽は理解され得ないとする見方が一般には受け入れられていたと考えられよう。

そんななか、音楽演奏に動物が反応する実体験を記した唐の代宗朝(762～779)の杜鴻漸の以下の話をみてみたい。彼は玄宗皇帝が得意としていた羯鼓という打楽器の名手であった。その彼が羯鼓を演奏したときのことである。

川の下手に羊の群れが見えて、たちまち数頭が足踏みを始め、やめなかった。わたしはそれが羯鼓の演奏のためとは思っていなかった。だが、羯鼓を止めると足踏みもやみ、また羯鼓を打つと足踏みを始め、ついには緩急高低に応じてリズムをとった。……それゆえに『尚書』にいう「百獣率舞」も難しいことではないと知ったのである。(初見羣羊牧於川下、忽数頭躑躅不已。某不謂之以鼓然也。及止鼓亦止、復鼓之、亦復然、遂以疾徐高下而節之……是知率舞固無難矣。)

『太平広記』巻205に引く『羯鼓録』

中略部分には、羊に加えて牧羊犬も羯鼓の演奏に合わせて首をあげ尾を振り体を動かしたとある。唐が大混乱に陥った安史の乱後に語られたこの出来事には、儒教的な治世の象徴としての「百獣率舞」の意味合いは含まれていないだろう。それゆえに、純粋に羯鼓の演奏に羊や犬が反応したとの記述であると考えられる。そうならば、古代に謂われた「百獣率舞」がこうしたことだったのかもしれないと感じた唐代の人に、それからまた千年以上の時を経たいま、筆者はふと共感を覚える。